無心の人の悅びが、有心の人の悲しみを誘ふことはどれほどであらうか。

岬の方までも響いて往つた。

その少女海の秘密をうかがひし罪を負ひてか啞となりぬる
あはれにも聲清かりきかなしみのすべてを歌のなかに籠むれば
九つの髑髏のなかに交るべきわれかと思ひ悲しかりけり

父は猶多くの傳說を私に語つた。或は水甕の中に入れられたまま砂に埋められた少女もあつた。或は蜥蜴の皮の着物を身に纏つて街を躍り廻つた少女もあつた。或は夜の精に瞳を吸はれて盲目となつた少女もあつた。これらの少女は、私に取つて何だか親しみのあるやうな心持がしてならなかつた。私は父がこれらの傳說を語り終つた時に、喜ばしげに云つた。

『まあ、嬉しいこと。みんな私のお友達なのね。』

父は私の言葉を聽くと同時に、激しい悲哀を感じたやうな樣子で、長い間身を顫はせて泣いてゐた。

哀れなる少女ばかりのものがたりあまりに我を泣かせたまふな
やがてまたわが身もかくは語らるるなかにまじるや幾年ののち
かなしみはわが家に滿ちぬ呼吸苦し胸も痛むとつぶやくは誰ぞ
夜となれば海鳥啼けば年老いしあらくれびとも涙ながしぬ

いづれも感傷に堪へた歌である。

四

翌日の朝には暴風もすつかり止んでしまつた。父は私が眼を覺ますのを見ると、急に何事か思ひ出したやうに起ち上つて、棚の上に戴せてあ

果さればならぬことが、終に迫つて來た

といふ感じが起る。

「あはれなる人身御供の女……」は、繰返し口誦むといよ〳〵哀れさを加へる歌である。

切迫詰つた心のうちにも、尙抑えることの出來ない強い好奇心を、微妙に描破してある。

「時々飛魚が銀の箭のやうに水の面を」以下、いかに

つた鏡を手に取つた。さうしてその鏡を私の前に置いて、長い間悲しげにそれを凝視めてゐたが、やがて嚴かな調子で口を開いた。

『この鏡を投げ込まれた家の娘は、如何してもあの洞窟へ人身御供に上げなければならない事になつてゐる。』

群がりし暴風の子等も過ぎ去りぬいづこの海を今日は馳すらむ
夜は明けぬいと靜かなる曉はわれらに來ぬと喜べどされど
あはれなる人身御供の女にもなほうつくしく夜は明くるや

父は私にそれが往昔から行はれて來たこの土地の悲しい習慣であると云ふ事を告げた。私は默つて唯涙を浮べた老いたる眼を眺めながら、この言葉のなかにあつた。

『美しい犧牲。』

と云ふ事を考へてゐた。さうしてこの洞窟の中には何があるだらうかと云ふ事を考へてゐた。私は恐怖よりも不可思議を知りたいと云ふ思の方が深かつた。

戀ならであふれ出でたる涙こそ更に悲しきものにありけれ
海近き里のならひも悲しかり戀にもあらぬ犧牲とおもへば
洞窟のありかやいづこそこに住む少女もとむるしれものや誰れ

私は父とともに漸く暴風から救つた小舟に乘つて、岬を廻つてから半里ほど先にある大きな洞窟の方へ漕いで往つた。空には白い鱗雲が一面に現はれて、海は眠つたやうに穩やかである。時々飛魚が銀の箭のやう

も微細なしかも綺麗な描寫である。

に水の面を掠めて船の傍を過ぎるばかりで、私の肩に懸つた黒髪を動かす程の風もない。しかし、船が次第に洞窟に近くなるに從つて、岩の形は劍のやうに鋭く、海の色は鐵のやうに黒くなつて來た。

岬より岬へかけてはるばると鉛のごとき潮のはしる日
こころよく海も眠りに入りぬらむ今すやすやと君の眠れば
鱗雲空にただよふ日となりぬあふぎ見る子は悲しかるらむ

幽玄な描述である。洞窟の天井から滴る雫を、「あらゆる人の涙を集めたもの」と思ひ做す一節は、極めてその境を効果多く偲ばせる。

洞窟の前まで漕ぎ寄せて來た時、父は艪の手を緩めて何事か思ひ惑つてゐるやうに見えた。さうして船を潮のまにまに漂はせてゐたが、急に心を決したやうな顔付をして艪を動かし始めると、船は飛ぶが如くに洞窟の中に走り入つた。艪の音が凄まじく洞窟の壁に反響して、舳が水を碎く度毎に暗黒のなかから青白い燐光が散つた。私は上から絶間なく落ちて來る水の雫を、あらゆる人の涙を集めたものではないかと疑つた。

既に身は新しい傳説の中にある。

潮黑し船漕く艪さへ重からむ恐怖の上をゆくとおもへば
死の洞か夢の窟か知らねどもただましぐらにわが舟は入る
いとさむき涙に君は立ち濡れぬ世にもかなしき雨とおもひて

洞窟の奥に往くと海が盡きた。さうして私達は船を棄てて岩の上を歩まねばならなかつた。私は父が手に持つた白蠟の火を頼りながら、海草が髪のやうに亂れて生へてゐる間を通つて、次第に奥の方へ進んで往つた。何處からともなく冷たい風が吹いて來て、火は幾度か消えさうになつた。私達は自分の跫音にも胸を轟かせながら、恐る恐る眞暗な路を辿

「海草は」は、豊かな夢幻味をもつた歌の一つ。

つて往く。さうして私達は何時か七つの石門の下を潜つた。

海草は黒髪のごとみだれけりその傍ゃ君のあゆめば
風吹きぬ吐息のごとき風吹きぬさすがに君も悲しからまし
うつくしき情をもてる子に會はず七つの門を過ぎて來ぬれど

第九の石門の前に立つた時、父は私の方を振り返つて云つた。

『さあ、いよいよ奥までやつて來たのだ。』

さうして私を手で制して置いて、自分一人石門を潜つて中に入つた。父の跫音が次第に遠ざかつて往くのを聽きながら、私は唯一人心細くも暗の中に立つてゐた。天井の方で蝙蝠の羽音が慵うく聽えて、何となく私を死へ誘ふやうに思はれた。

いづれも幽暗な歌である。「いと暗き…」は繊細な感觸を與へられる

神秘劇の一場のやうな光景である。

いと暗きところにあれど黒髪はなほうつくしく見ゆる君かな
蝙蝠のはばたきも憂し怖しきところへ誘ふものとおもへば
くらやみは霧のごとくにみなぎりてかなしや君の路をさへぎる

父が再びこの石門の所へ歸つて來たのは、それから一時間も過ぎてからであつたらう。暗い岩蔭から白蠟の光が微かに洩れて來たかと思ふと急に父の顔が石門の入口に現はれた。さうして悲しげな調子で私に向つて叫んだ。

『靜かに己の後から付いて來るんだ。』

私は父に從つて石門を潜つた。かくて私は最後の場所へ來たのである。

深厳な背景である。この背景の前で何ものが何を演ずるのであらう

「堂のなか……」は悒鬱の殿堂内の沈黙を巧みに詠み出でた歌。「天井の龍……」も宛がら生あるものゝごとく四周のものを詠じた點が、この境に適つていゝ。

蠟涙は岩にこぼれぬはかなしくもそを傳はりて君はたどるや
ああ遂に最後の洞にきたりぬと暗にむかひて君の云ひける
悲しげに皺嗄聲のひびく時運命をこそ思ひ出でけれ

そこは美しい殿堂の形を具へてゐた。穹窿には高く幾萬の龍を彫つてあつた。四方の壁には深く幾千の鷲を刻んであつた。さうして向ふの正面には大きな壇があつて、その上には黄金の櫃が唯一個厳かに置かれ、その兩側に立つた二個の香爐からは、不思議な匂を漲らす白い煙が微かに顫へながら立昇つてゆくのが見えた。誰が何を焚いたのであらう。

堂のなか愁ひかなしみ呪咀いかりありとあらゆる思滿ちたる
天井の龍も君をばかなしまむ壁の鷲さへ君をなげかむ

一場が終つたわれ〳〵は尙次の一場を待たればならぬ

怪しくも香爐はわれの目に映る煙のにほひみなぎりし時

父は私を壇の前に置いて、長い間祈るやうな形をして、口の中で何事か呟いてゐた。さうしてもう涙も流さないで私に別れを告げた。私は父が最後に云ひ殘した明日來ると云ふ言葉を賴りにして、唯一人この白蠟の火微かなる洞窟の中にゐなければならなかつた。私は默つて四邊を見廻した。さうして壇の上に置かれたあの黄金の櫃に眼の往つた時、さつき警められた言葉を思ひ出した。

『あの黄金の櫃の中だけは、如何しても見てはいけないのだぞ。』

老翁はひとり祈りぬ幸あれとやがて死ぬべき犧牲の身に
君がためわれはいまこの洞窟をかなしみに往く道と名づけむ

最後のアクトがとうたう行はれた。文章には一分の弛みすらない。讀む者の心に黒い魔氣が殘る。

思ふことの多いいゝ歌である。技巧も巧みといはればならぬ。

黄金のひかりまばゆくわが君のこころを遠く夢に誘ふ

この言葉を思ひ出すと同時に、私は強い誘惑に出會はなければならなかつた。私は跫音を忍ばせてその黄金の櫃に近寄つた。さうして重い蓋に手を懸けて、一生懸命に押し開いた。私はその中を覗かうとした一瞬間に、一群の騒がしき跫音を聽いた。驚いて蓋の手を離して振り返つた途端、黒い衣を着た人が十人あまりも私の方へ走つて來たかと思ふと、氷のやうに冷たい手が烈しく私の面を擊つた。

誘惑は戀より強きちからもてせまりぬ君よ怖れたまふな
跫音は嵐のごとしすさまじく君が愁のうへにみだるる
いとさむき手は來ぬ千里あなたより夢まぼろしの壁のなかより

實感を喚る描述である。

「かにかくに……」も、「日光よ……」も共に哀愁の漲

五

私はそのままこの洞窟の中に倒れてゐたのを、翌朝再び入つて來た父のために助けられた。しかし、それから私の眼は再び開かなかつた。冷たい手に烈しく擊たれた時、私の黒瞳は兩方とも碎かれてしまつたのである。

『盲目。』

ああ、この悲哀を誰が知つてゐやう。太陽は溫かに私の身の上に輝いてゐるけれども、私はその美しい光を見ることが出來ぬ。光ばかりではない、あらゆる色も。

呼吸絶えむあまりに暗の深ければあまりなげきの底に沈めば

つた歌。獨立した歌としてみても興が深い。

最後の三首はこの物語を極めて暗示的に結ぶものである。「不可思議は……」と、「かくてまた……」とは、共に作者の人生觀の現はれと見ていゝ。老婆が語りついで來て、「百年むかしのこと

うつくしき盲目となりぬたとふればかのうら若き戀びとのごと
かにかくに盲目は悲し海鳥の啼くこゑをさへうれしとおもひぬ
日光よ盲目のためにかがやけと高く叫びて涙ながしぬ。

あの黄金の櫃の中には何が入つてゐたのであらう。あの黑い衣を着た人々は何をしてゐたのであらう。あの冷たい手は何故私を盲目にしてしまつたのであらう。

父も私もそのことは何にも云はなかつた。私達は再び船に乘つて洞窟を出た。さうして岬を廻つて再び「鰐の御殿」へ歸つて來た。それから と云ふものは私の前には、眞暗な夜ばかりが續くやうになつた。しかし、鏡はもう私の家には投げ込まれなかつた。

といつたのは諧謔ならぬ悲しい諧謔ともいへるであらう。作者の獨壇場とする抒情散文詩の一篇。

不可思議は不可思議としてあらしめよあまり寂しき人の世なれば
かくてまたいかなることを樂しまむかなしき夜のなかに住む子は
かく語り終りて老婆かなしげに云ひぬ百年むかしのことと

大正七年三月廿七日印刷
大正七年三月三十日發行

定價金五十錢

自然と人生叢書
第三編
（河霧）

著作權者印

著作者　吉井勇
發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彦
印刷者　東京市京橋區月町二十五番地　高橋郁
印刷所　東京市京橋區月町二十五番地　三協印刷株式會社

■圖書目錄贈呈■

發行所　東京市日本橋通四丁目　春陽堂
振替一六一七
電話本局五一

■島崎藤村氏作■

藤村文集

和田英作氏装

縮本携帶至便

常に新酒の如く世に迎えらるゝものは藤村氏の詩文也。本書は『藤村詩集』と同時代の散文集にして詩によつて表白し得ざる著者若き日の自由奔放なる感情思想の結晶なり。されば本書を耽讀する者は『藤村詩集』を愛誦せざるべからざると同時に、詩集を愛吟する人々は又本書を繙かざるべからず。新版成るに際し讀者の便を思ひ、特に『藤村詩集』と同形を選ぶ、之れ眞に好個の姉妹篇。

菊半形三百十頁箱入

價六十五錢・送料六錢

■藤村詩集

價八十錢
送料八錢

『藤村氏は詩人であつて、唯の小説家ではない』と誰かゞ云つたが、氏の藝術の根柢は「詩」である。氏の詩を知らずして氏の藝術を談ずる事能はず氏の小説を味ふことは出來ない。氏の詩集の實行が日毎頻繁になり行く事實はよく此詩集の價値の不朽を立證してゐる。

露伴作心のあと
出盧

價八十錢
送料八錢

鴎外作
うた日記

一圓八十錢
送料八錢

紅葉作
紅葉短册帖

價金二圓
送料十三錢

薫園作
覺めたる歌

價四十錢
送料六錢

紅葉・露伴共編

西鶴文粹

（縮刷）

（目次）

好色一代男
胸算用
好色一代女
二人女
日本永代藏
武家義理物語
本朝二十不孝
櫻陰比事
諸國はなし
好色五人ぐ
武道傳來記
萬の反古
新織記
置土産
可笑留

西鶴物を措いて何處に艶美なる情話物語ありや。何處に眞の人間生活を活寫せる藝術ありや。

日本生粹の艶文にして至高なる藝術的價値を有するものは實に西鶴の文章なり。而かも本書は紅葉、露伴二大家の嚴正なる鑑賞と批判との下に、その粹中の粹を蒐めたるものにして、華麗なる裝幀と共に世の鑑賞を恣にすべきことを信ず。

金箔押裝幀
美善
一圓二十錢
送料八錢

縮刷

多情多恨

紅葉著

十六畫伯畫

世俗金色夜叉を紅葉氏の傑作と云つて居るが、畢竟弘く讀み深く味ぬからである。わが紅葉氏の榮譽ある地位は本作によつて得られ、本作により永遠なるものである。

新型美裝
金八十錢
送料八錢

□鷗外森林太郎氏著□

齋藤松洲氏裝　永原止水氏書

■美奈和集

▼縮刷

□新型特製美本
□價一圓五十錢
□送料八錢

文學に多少の趣味を有する人で水沫集の名を知らない人はあるまい。我が文壇の人にして水沫集より異常の興味と幾多の啓發とを受けない人はあるまい。實に本集は文壇唯一の寶典にして而も其價値は日々新たなるものである。收むる處『舞姫』『うたかたの記』『埋木』『折蕎薇』等二十篇九百餘頁、鷗外博士の傑作及び諸外國の代表的作家の傑作のみ。何れも優雅なる國文と雄渾なる漢文と精巧なる歐文脈とを融合調和して新文運を開拓せる名什。今や縮刷美裝して刊行さる、藝術の精髓、異國の精華收めて玆にある。

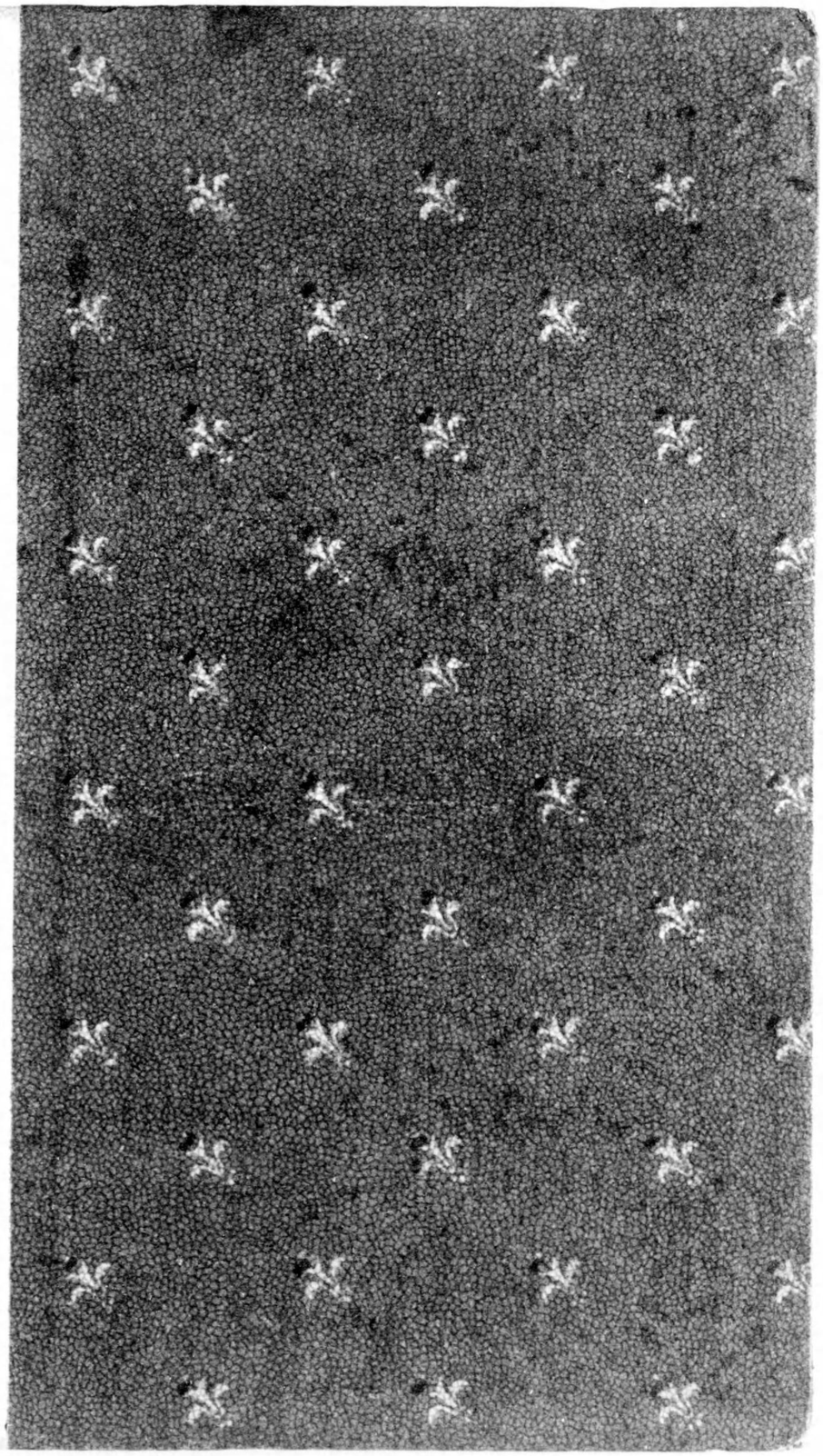
永原止水氏裝幀

■即興詩人

▼縮刷

□新型極美本
□定價金一圓
□送料八錢

原書は丁抹人アンデルセンが筆に係り、譯者其完成に大約九星霜を費す。簡素質實たる國語と雄渾奇勁なる漢文とを調和し、屈曲自在なる雅言と放膽楚麗なる俚辭とを融合し、玆に些かの罅裂をも見出し能はざる藝術品を形成せり。即興詩人の行動こそまことに眞そのものの美そのものにして、局面の轉化は讀者の端睨を許さず。其言は岩間の淸水の如く冷瓏人の肺腑を衝く。實に我文壇不滅の典據といふも、尙辭の足らざるを憾む。

8/12
1225

終